HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教育段階における高等学校の地位の研究・第三次報告：第二次報告の補遺として
Author(s)	城戸, 幡太郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 4, 1-11
Issue Date	1956-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28984
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P1-11.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

教育段階における高等学校の地位の研究・第三次報告

——第二次報告の補遺として——

研究代表者　城戸幡太郎

この研究は北海道大学教育学部の綜合研究として昭和30年度の文部省科学研究助成金によつて行つた調査の一部についての報告であり，第二次報告の補遺として発表するものである。第二次報告では，大学と高等学校との教育的連関を問題として，高校生の進学態度と学習態度についての調査を報告したのであるが，高校生の進学が条件づけられている社会的要因について特に彼等の家業との関係を見ようとしたものである。なおこの問題に連関する，一つの参考資料として，高等学校の教員を志望する大学生の家業についての調査を附加しておいた。これらの調査は黒田孝郎助教授が主として分担したもので，この報告の第一部及び第二部は同氏によつて執筆されたものである。

この綜合研究は昭和30年度において一応完了されたものであり，今年度において研究の結果をまとめて報告するつもりであつたが，この紀要の刊行には間にあわなかつたので，それは追つて報告の機会を得ることとし，ここには，この調査結果を第二次報告の補遺として発表することにした。

第一部　生徒の進路から見た高等学校教育の問題点

中学校から高等学校に進学してくる者は，どのような生徒であろうか。高等学校を卒業して行く者は，どのようなところに進んでいくのであろうか。

彼等は，どのようなことを考え，どんな目的をもつて，高等学校に進学し卒業していくのであろうか。そういつたことについて，高等学校に在学している生徒から聞いた結果については，第一次報告としてある程度までのべておいた。しかし，この方法は，生徒自身にきくというのであるため，主観的になるということはいなめない。

今一つ問題は，中学校卒業生を高等学校に送つたり，高等学校卒業生を社会と大学に送つたりする社会的な意義について考えてみる必要がある。どのような要因が，彼等を上級の学校に送つたり社会に出したりすることに影響を及ぼすのであろうか。また，社会は，その教育に何を期待しているのか，あるいは要求しているのか。そこでの教育は社会での要望に応えているのであろうか。このように，高等学校の教育を社会的機能としてみることは，きわめて大切なことである。

しかし，われわれは，当面の問題として，生徒個人個人の側から，社会的な面への接触を試みてみた。そこで，29年3月に中学校及び高等学校を卒業した生徒について，その生徒の家の家計をささえている産業と，その生徒の進路，中学校の場合には中三テストと略称されている全道一斉に同一条件のもとに実施される試験の成績を，一人一人について調査した。この章は，それを調査した結果の報告である。勿論，その他に，生徒の家の経済状態・家族関係・さらに地域の文化的・経済的状態という方面からの考察の必要性を認めるのであるが，容易に結果の得られるものとして，一応上にのべたようなところに限定した。

調査方法　中学校に依頼して，29年3月に卒業した生徒一人一人について，その家計をささえている産業・卒業後進学した学校名・全道一斉に行つた中学三年学力テストの成績を調査し提出してもらつた。実際の記入は，その卒業生担当の先生にお願いした。

調査地域 第二次報告を行つた岩見沢市内の中学校を選んだ。岩見沢市は，札幌市へ汽車で1時間のところにあつて，学芸大学の分校があり，高等学校から大学への進学率も高いところである。当地は，北海道内では早くから農業の開けたところであつて，空知地方の農業発展に支配的な役割をはたした伝統のある岩見沢農業高等学校，かつての空知農業学校のあるところでもある。また，附近は炭鉱地帯をひかえている上，交通上では函館本線と室蘭本線との合流点である。従つて裕福な農家の子弟や鉄道従業員の子弟も多く，高等学校への進学者も多く全道一斉に行う中学三年学力テストの成績では，全道でも高い方である。

岩見沢と比較する意味で，他の町についても調査したが，ここでは女満別町をあげることにする。女満別町はオホーツク斜面にあつて，網走市の隣町である。早くから屯田兵の入つたということでは岩見沢と同じであるが，岩見沢のように炭鉱をひかえるわけでもなく，交通上の要衝というわけでもなく，稲作の北の限界に近く，馬鈴薯・甜菜等農産物生産の中心地である。女満別は，もともと岩見沢との比較の意味で取上げたのであるが，遠隔の地であるため連絡も十分でなく，特に，中学三年学力テストの成績を取よせることに不便があつたため，全部の生徒について調査することが出来なかつたことを断つておく。

§1. 家の産業と進路 その1. 中学校卒業生

岩見沢市について，男子についてみてみると，第1表のようになる。

ここで，目立つことは，農家の子弟は高等学校への進学の率が少なく，家事手伝の率が多いということ，公務・運輸通信・農業に定時制への進学者の率が多いということ，工業・卸及び小売業に就職の率が多いということである。中学校を卒業してから，さらに学校に進学する者の百分率は，定時制をも含めて運輸通信業95.2％・公務92.6％・サービス業87.8％・卸及び小売業80.3％・工業74.1％・農林業57.5％となる。

第1表 岩見沢市中学校卒業生の進路（男）

	全日制		定時制		当市以外の高校		その他の学校	家事手伝	就職	その他	計
	普通	実業	就職	未就職	公立	私立					
農林業	31 (21.2)	20 (13.7)	3 (2.1)	19 (13.0)	5 (3.4)	5 (3.4)	1 (0.7)	52 (35.6)	9 (6.2)	1 (0.7)	146 (100.0)
工業	29 (46.8)	4 (6.4)	2 (3.2)	4 (6.4)	2 (3.2)	5 (8.1)	-	5 (8.1)	11 (17.8)	-	62 (100.0)
卸及び小売	32 (62.5)	2 (3.9)	1 (2.0)	1 (2.0)	-	4 (7.8)	1 (2.0)	3 (5.9)	7 (13.8)	-	51 (100.0)
運輸通信	39 (62.9)	7 (11.3)	2 (3.2)	6 (9.7)	2 (3.2)	1 (1.6)	2 (3.2)	1 (1.6)	2 (3.2)	-	62 (100.0)
サービス業	25 (75.8)	-	2 (6.1)	1 (3.0)	-	1 (3.0)	-	2 (6.1)	2 (6.1)	-	33 (100.0)
公務	37 (68.5)	1 (1.8)	7 (13.0)	3 (5.6)	1 (1.8)	1 (1.8)	-	3 (5.6)	1 (1.8)	-	54 (100.0)
その他	4 (25.0)	-	3 (18.7)	1 (6.3)	1 (6.3)	1 (6.3)	-	1 (6.3)	3 (18.7)	2 (12.5)	16 (100.0)
計	197 (46.5)	34 (8.0)	20 (4.7)	35 (8.3)	11 (2.6)	18 (4.2)	4 (0.9)	67 (15.8)	35 (8.3)	3 (0.7)	424 (100.0)

註 工業は鉱業・建設工業・製造工業をふくむ。

次に，同じく岩見沢市で女子についてみてみよう。

第2表 岩見沢市中学校卒業生の進路（女）

	全日制		定時制		当市以外の高校		その他の学校	家事手伝	就職	その他	計
	普通	実業	就職	未就職	公立	私立					
農林業	25 (16.4)	6 (3.9)	-	-	-	1 (0.7)	11 (7.2)	97 (63.9)	11 (7.2)	1 (0.7)	152 (100.0)
工業	25 (43.1)	-	1 (1.7)	1 (1.7)	-	-	5 (8.6)	8 (13.8)	15 (25.9)	3 (5.2)	58 (100.0)
卸及び小売	26 (68.5)	1 (2.6)	1 (2.6)	-	1 (2.6)	3 (7.9)	1 (2.6)	3 (7.9)	2 (5.3)	-	38 (100.0)
運輸通信	47 (54.7)	2 (2.3)	-	-	1 (1.2)	10 (11.6)	5 (5.8)	10 (11.6)	11 (12.8)	-	86 (100.0)
サービス業	20 (58.9)	-	-	-	1 (2.9)	4 (11.8)	1 (2.9)	4 (11.8)	3 (8.8)	1 (2.9)	34 (100.0)
公務	24 (55.9)	2 (4.6)	-	-	-	2 (4.6)	3 (7.0)	5 (11.6)	7 (16.3)	-	43 (100.0)
その他	12 (41.4)	-	-	-	1 (3.4)	3 (10.4)	2 (6.9)	6 (20.7)	5 (17.2)	-	29 (100.0)
計	179 (40.7)	11 (2.5)	2 (0.5)	1 (0.2)	4 (0.9)	23 (5.2)	28 (6.4)	133 (30.2)	54 (12.3)	5 (1.1)	440 (100.0)

ここで，目立つことは，やはり農家の子弟は高等学校への進学の率が少く家事手伝いの率が多いということ，工業・公務・運輸通信の者に就職の率が多いということである。中学を卒業してからさらに学校に進学する者の百分率は，卸及び小売 86.8％・公務 72.1％・運輸通信 75.6％・サービス業 79.4％・工業 55.1％・農林業 28.2％となる。

ここで，男と女をくらべてみると，一般に中学校卒業後さらに進学する者は男の方が多いのであるが，卸及び小売業では男の 80.3％に対して女は 86.6％となつて，女の方が多くなつていることは注目すべきことである。男と女でいちぢるしく異るのは，農林業で女の進学者が少く，男にくらべて家事手伝いが多いこと，工業・公務・運輸通信では女の就職者の多いこと，卸及び小売業では男の就職者が多いことである。

§2. 家の産業と進路　その2. 高等学校卒業生

次に，同じ岩見沢市にある高等学校について，中学校と全く同様に調査した結果をあげておこう。岩見沢市には，旧制中学校・旧制高等女学校が高等学校になつたのと，さきにのべたように農業高等学校がある。農業高等学校は，しばらく別にして，二つの高等学校を合せてみる。これら高等学校の通学区域は，岩見沢市及びその周辺の町村である。

ここで，大学進学者及び未入学者の合計即ち大学進学を意図していた者の百分率は，農林業 76.0％・工業 73.0％・卸及び小売業 72.0％・サービス業 75.6％・公務 69.7％と大して違いがないことがわかる。また，本州私大への進学者は卸及び小売業に目立つて多く，32％に上つている。

全体をみると，道内大学進学者 21.4％・本州大学進学者 23.2％・未入学者 27.6％・就職者 20.7％ということになる。まとめると，大学進学者 44.6％・未入学者 27.6％・就職者 20.7％・家事手伝及びその他 7.2％となる。即ち，進学希望者は 72.1％ということになる。

次に，女子についてみてみよう。進学者及び未入学者即ち進学を意図した者は，農林業 14.2％・工業 38.0％・卸及び小売業 31.8％・サービス業 37.5％・公務 10.8％である。これは男子にくらべて，いちぢるしく少ない。工業・卸及び小売業・サービス業では，30％以上の者が進学している

のであるが，卸及び小売業では洋裁学院が多い。

第3表 岩見沢市高等学校卒業生の進路（男）

	北大	学芸大	小樽商大 室蘭工大	道内私大	本州大		未入学	就職	家事	その他	計
					官公立	私大					
農林業	3	7	2	1	7	5	13	6	3	3	50
工業	2	3	-	-	-	7	15	8	-	2	37
卸及び小売	1	3	2	2	-	16	12	11	1	2	50
運輸通信	1	2	-	-	-	1	1	3	-	-	8
サービス業	5	8	-	1	2	8	13	8	2	2	49
公務	3	8	-	2	1	10	15	15	-	2	56
その他	1	2	-	-	1	6	7	6	2	1	26
計	16	33	4	6	11	53	76	57	8	12	276

註 未入学は進学適性検査受験者で大学に入学していない者。

第4表 岩見沢市高等学校卒業生の進路（女）

	北大	学芸大	道内私大	本州私大	洋裁学院	看護学院	未入学	就職	家事	計
農林業	-	2	2	-	1	-	-	6	24	35
工業	-	-	2	-	3	2	1	2	11	21
卸及び小売	-	2	4	1	7	-	-	12	18	44
運輸通信	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2
サービス業	3	-	5	1	4	2	-	10	15	40
公務	-	1	4	-	1	1	-	15	25	47
その他	1	3	2	2	1	-	-	11	16	36
計	4	8	19	4	18	5	1	57	109	225

全体をみると，何といつても家事手伝いが48.4％をしめていることはいちぢるしく目立つ。特に農林業では家事手伝いが68.5％に上つている。家事手伝いが，平均の百分率より小さいのは，卸及び小売・サービス業である。次に，就職が25.3％，残りが進学とみてよい。

§3. 家の産業と進路　その3. 中・高等学校の関連

家計をささえている産業による進学の状態は，中学校から高等学校への場合と高等学校から大学あるいはその他の学校の場合との間に相違があるであろうか。ここで，その他の学校というのは，女子の場合であつて看護学院及び洋裁学院のことである。その結果を示したものが，第5表及び第6表である。

第5表 岩見沢市進学希望百分率（男）

	高等学校進学者			大学進学希望者			
	全日	定時	計	道内入学	本州入学	浪人中	計
農林業	41.7	15.1	56.8	26.0	24.0	26.0	76.0
工業	64.5	9.6	74.1	13.5	18.9	40.5	72.4
卸及び小売	74.2	4.0	78.2	16.0	32.0	24.0	72.0
運輸通信	79.0	12.9	81.9	37.5	12.5	12.5	62.5
サービス業	78.8	9.1	87.9	28.6	20.4	26.5	75.5
公務	73.9	18.6	92.5	23.2	19.7	26.9	69.8
その他	37.6	25.0	62.6	11.5	26.9	26.9	65.3
計	61.3	13.0	74.3	21.4	23.2	27.6	72.2

まず，男子の場合をみてみよう。

中学校から高等学校へ進学した者は74.3％，高等学校から大学に進学しようと意図した者は72.2％で，殆んど同じ

である。もつとも，その年に入学出来たものは44.6％であつて，残りの27.6％は，大学進学適性検査は受験したが，大学に入学はしていない。全般的にみて，それは当然のことではあるが，高等学校から大学への進学者の率の方が中学校から高等学校への進学者の率より少いのであるが，逆になつているのがある。それは農林業に従事している者の子弟である。中学校から高等学校への進学者の率は全体よりはるかに少く56.8％であるに反して，高等学校から大学への進学者は全体より多く76.0％となつている。そういつた現象の起る反面，中学校から高等学校への進学者の率にくらべて高等学校から大学への進学者の率がいちぢるしく減少するのがある。公務・運輸通信・サービス業である。特に公務では，中学校から高等学校への進学者92.5％であつたのが高等学校から大学への進学者は69.8％となつている

女子の場合は，男子の場合といちぢるしい相違がある。まず，中学校から高等学校への進学者の率は50.0％，高等学校から大学あるいはその他の学校への進学者の率は25.7％となつている。ただ，卸及び小売業では，中学校から高等学校へ進学する率が男子では74.2％であるのに対して女子では81.6％と，女子の方の率が多くなつているのが目立つ。これは男子の場合に就職者の多いためである。これまでに見てきたいろいろな現象において，この卸及び小売業というのは，それぞれの場合に特異な状態を示している。運輸通信・サービス業・公務の三つはまず同じ傾向を示しているようである。おそらく多くは，それが俸給生活者であるというところによるのであろう。これらのことから，このような産業分類は，生徒の進路を決定する基本的な要因を摘出するのに余り適当なものではないと考えられる。

第6表　岩見沢市進学希望百分率（女）

	高等学校進学者			大学その他進学者		
	全日	定時	計	大学	その他学校	計
農林業	21.0	0.0	21.0	11.4	2.9	14.3
工業	43.1	3.4	46.5	9.5	23.8	33.3
卸及び小売	81.6	2.6	84.2	15.9	15.9	31.8
運輸通信	69.8	0.0	69.8	-	-	-
サービス業	73.6	0.0	73.6	22.5	15.0	37.5
公務	65.1	0.0	65.1	10.6	4.6	15.2
その他	55.2	0.0	55.2	22.2	2.8	25.0
計	49.3	0.7	50.0	15.5	10.2	25.7

註　大学その他進学者中，運輸通信は2名で，1名は洋裁学院，1名は就職，また，工業には1名未入学者がいる。

第7表　岩見沢農業高等学校卒業生の進路（男）

	道内官私大	本州大	未入学	就職	未就職	自営	その他	計
農林業	10	9	2	60	13	116	1	210 (61.0)
工業	2	1	1	49	11	4	-	68 (19.7)
卸及び小売	-	1	-	7	-	1	-	9 (2.6)
運輸通信	-	-	-	14	9	1	-	24 (7.0)
サービス業	-	-	-	4	2	3	-	9 (2.6)
公務	-	1	1	10	3	1	-	16 (4.5)
その他	-	-	1	7	-	1	-	9 (2.6)
計	12 (3.5)	12 (3.5)	5 (1.4)	151 (43.6)	38 (11.0)	127 (36.8)	1 (0.3)	345 (100.0)

§4. 農業高等学校の場合

岩見沢農業高等学校について調査した結果をかかげる。この学校では女子は40名に満たないのであげないことにする。

卒業生345人中，210人，61％が農家の子弟である。そのうち，家に帰つて農業に従事する者が55.2％，就職を希望する者が34.8％，就職した者が28.6％，大学進学を意図した者が10％である。これらの値は，高等学校における農家の子弟といちぢるしく異つている。そこでは，第3表からわかるように，家に帰つた者6％，就職12％，大学進学を意図した者76％，大学入学者50％となつている。

§5. 進路と成績

北海道では，高等学校に進学する者もしない者も，一斉に同一の問題で同一の条件のもとに，国語・数学・理科・社会・図工について学力テストを行つている。もつとも，29年度には，進学する者としない者との試験場を変えたが，本調査の資料となつた28年度は全く同一の条件のもとに行われた。この試験では，英語と職業のいづれかを選択することになつているが，集計にあたつては，この選択教科の点数を除いた総点を用いた。

岩見沢市の市街町にある中学校について，中学三年学力テストの点数の度数分布を進路別にとつたのが，第8表及び第9表である。きわめて大まかないい方であるが，男女を通じて，普通課程に進む者，実業課程及び定時制高等学校に進む者，その他の学校に進む者及び進学しない者，と成績の上から大きく分けることが出来るようである。しかしながら，実業課程に進む者・定時制高等学校に進む者・その他の学校に進む者・進学しない者の中に，表からみてわかるように，成績の優秀

第8表 岩見沢市中学校中三テスト成績（男）

	普通	実業	定時	その他の学校	不進学	計
100～90	7	-	1(1)	-	-	8
89～80	29	1	-	1	-	31
79～70	59	3	1(1)	-	-	63
69～60	48	7	7(5)	-	2	64
59～50	19	6	10(5)	3	8	46
49～40	2	5	13(7)	11	10	41
39～30	-	1	10(5)	7	12	30
29～20	-	-	4(1)	4	16	24
19～10	-	-	-	2	4	6
9～0	-	-	-	-	-	-
計	164	23	46(25)	28	52	313

第9表 岩見沢市中学校中三テスト成績（女）

	普通	実業	定時	その他の学校	不進学	計
100～90	2	-	-	-	-	2
89～80	9	-	1(1)	-	-	10
79～70	42	-	1	-	1	44
69～60	61	-	-	1	4	66
59～50	30	2	-	5	8	45
49～40	7	6	1(1)	9	29	52
39～30	3	1	-	13	28	45
29～20	-	-	-	8	18	26
19～10	-	-	-	3	9	12
9～0	-	-	-	-	-	-
計	154	9	3(2)	39	97	302

註 定時制の欄でカッコの中にある数は就職者の数。
全体については，平均58.8，標準偏差19.2
普通課程進学者，平均71.6，標準偏差10.5
全体については，平均52.8，標準偏差18.2
普通課程進学者，平均65.6，標準偏差10.6
その他の学校とは，職業保導所・洋裁学院・看護学院等のことである。

な者のふくまれていることを無視することは出来ない。この調査の中で進学しない理由を，

1. 本人の意志によるのか。
2. 本人は進学を希望しているのを家で反対されたためであるのか。
3. 成績がよくないからであるのか。

4．　そのいづれか不明。

であるのかを，担任の先生に記入してもらつた。その結果，男子では，1．本人の意志によるもの3。2．本人は希望するが家で反対のためによるもの12。3．成績によるもの1。4．不明14。女子では，1．本人の意志によるもの8。2．本人は希望するが家で反対のためによるもの15。3．成績によるもの3。4．不明10であつた。中学三年学力テストの準備は，岩見沢市では相当熱心に行われているとみてよく，定時制高等学校に行くものや進学しない者は，準備の気乗り薄さのために成績が上らないということもありうることである。あるいは，それ以前に，進学出来ないということ及びそのような環境によつて，上るべき成績が上らなかつた，ということも考えられる。従つて第8表及び第9表から直ちに，定時制高等学校に進む者や進学しない者は，普通課程に進む者と比較して先天的に能力が劣る，と判断することは危険であると思う。

次に，女満別町の中学校について，中学三年学力テストの成績を取上げよう。この場合，テスト

第10表　女満別町中学校中三テスト成績（男）

	普通	実業	就職	計
100～90	1	-	-	1
89～80	-	-	-	0
79～70	5	1	-	6
69～60	3	2	-	5
50～50	6	4	-	10
49～40	3	10	4	17
39～30	-	10	9	19
29～20	-	-	12	12
19～10	-	3	3	6
9～0	-	-	2	2
計	18	30	30	78

全体についての平均41.7，標準偏差18.1

第11表　女満別町中学校中三テスト成績（女）

	高等学校	その他の学校	就職	計
100～90	-	-	-	-
89～80	-	-	-	-
79～70	-	-	-	-
69～60	*2	-	2	4
59～50	2	2	1	5
49～40	1	-	6	7
39～30	1	2	13	16
29～20	-	1	11	12
19～10	-	-	4	4
9～0	-	-	-	-
計	6	5	37	48

註　高等学校*の中1名は商業課程，他は普通科
全体についての平均37.5，標準偏差13.1

の成績の得られなかつた学校があつたので，生徒数は限定されて少くなつたが，参考として出しておく。ここでは，就職者について，進学しない理由を調べたところ，男では，1．本人の意志によるもの24。2．本人は進学を希望するが家で反対のためによるもの1。3．成績がよくないからというもの5。女では，1．本人の意志によるもの35。2．本人は進学を希望するが家で反対のためによるもの1。3．成績がよくないからというもの1，という状態であつた。こういつたことについてはさらに女満別町の状態について考察を必要とするが，ここではふれないことにする。

第二部　学生の教職課程履修の態度から見た高等学校教員養成の問題点

中学校及び高等学校の教員養成の問題を取上げてみよう。それらの教員は，学芸大学においても養成されるのであるが，北海道大学においても年々，教員免許状の取得を志す学生が増加してきている。そこで，どのような教科の免許状を取得することが意図されているか，また，将来教職につくことをどの程度に考えているのか，それと家の生活を立てている職業とはどんな関係にあるか等

の問題について調査した結果を報告することにする。

これは，30年度の教職課程の試験に際して，調査用紙を配布して学生に記入させたものである。学部学生（大学院を含む）327人，一般教養学生59人についての調査である。一般教養は，未だ学部も決定していないので除外することにした。教職課程の試験は毎年行つているのであつて，在学中に受験すればよいのである。従つて，この調査の対象となつた学生は，たまたま30年度に教職課程を受講した学生なのであつて，全学の教員免許状取得希望者を対象としたものではない。しかし，これをもつて，全学の教員免許状取得希望者の偏りのない標本とみることが出来ると思う。

なお，この調査は，教職課程を受講した学生に対して行つたものであるから，被調査者は，将来教職につくことをある程度予期しているものと考えられる。そのような母集団について，そのような前提の上に立つての調査であるので，一般の学生が教職についてどのように考えているか，ということに対する資料にはならない。教職につくことを何等かの意味で予想して，教職課程を受講した学生についての内向的な調査であることを繰返して断つておく。

§1. 所属学部と希望の程度

教員になることをどの程度希望しているかをみるため，

1. 教職につくことを第1志望としている。
2. 教職につくことを第2志望としている。
3. そ の 他

を調査してみた。

北海道大学においては，学部所属は2年目後期に決定するのであるが，水産学部は入学と同時に決定している。そこで，上の表においては水産学部の学生52名は条件が異るので除外することにした。また，教育学部学生は，学部の講義によつて，取得可能なので，この調査を実施した時対象になつた者は僅かであつた。

第12表 学部別志望人数

	第1志望	第2志望	その他	計
文学部	23	17	0	40
教育学部	0	1	1	2
法学部	10	16	2	28
経済学部	5	14	4	23
理学部	36	34	14	84
工学部	6	13	2	21
農学部	21	47	9	77
計	101	142	32	275
%	36.7	51.6	11.6	100.0

この表から，教職課程を受講した者のうち，36.7％の者が教職につくことを第1志望としていること，51.6％の者が第2志望としていること，11.6％の者がその他であることがわかる。この傾向といちぢるしく異つているのは，文学部と理学部であつて，そこでは，教職につくことを第1志望としている率が高い。即ち，文学部では第1志望57.5％，理学部では第1志望47.9％となつている。

第13表 理学部学科別志望人数

	第1志望	第2志望	その他	計
数学	9	5	3	17
物理	5	9	4	18
化学	4	5	5	14
地鉱	1	5	0	6
生物	17	8	2	27
地球物理	0	2	0	2
計	36	34	14	84

特に理学部について，各学科別にみてみると，次のようになつている。ここで，第1志望の多いのは数学科と生物学科である。

§2. 取得教科と志望

学生の取得しようとしている教科はどんな科目か，そして，それを取得しようとする意志はどの程度であるかをみてみよう。

ここで合計は，総数327人を上回つているが，それは一人で数科目を取得しようとしている者があるためである。

第14表　教科目別志望数

	第1志望	第2志望	その他	計
国語	13	16	2	31
社会	22	49	7	78
数学	14	22	7	43
理科	36	92	21	149
音楽	2	0	3	5
保健体育	0	2	0	2
保健	0	0	0	0
農業	8	34	6	48
工業	6	6	0	12
商業	1	6	2	9
水産	2	15	0	17
職業指導	1	4	1	6
英語	8	29	3	40
ドイツ語	3	3	1	7
中国語	0	1	1	2
ロシア語	1	2	0	3
宗教	1	0	0	1
計	118	281	54	453
百分率	26.1	62.0	11.9	100.0

第12表は人によつて分類したのであるが，第14表では，取得しようとしている教科によつて分類したことになる。この二つを比べてみると，志望による分類で，“その他”となつているものの百分率は，人による分類では11.6％，教科による分類では11.9％で，大した違いはない。しかし，第1志望と第2志望とによつて相違がみられる。即ち，人による分類では第1志望36.7％・第2志望51.6％であつたのが，教科による分類では第1志望26.1％・第2志望62.0％となつている。これは，教職につくことを第1志望としている者よりも，第2志望としている者の方に，自分の専攻とする教科目以外の教科の免許状を取得しようとする者が多かつたためであろう。即ち，教職につくことを第1志望としている者は教えようとする教科を一つに定めているが，第2志望としている者にはいくつかの教科を教えようとしている，ということになる。

教科を大きくまとめて，国語・社会・数学・理科・実業・語学ととり上げてみると，次の表のようになる。

第15表　大教科目別志望数

	第1志望	第2志望	その他	計
国語	13	16	2	31
社会	22	49	7	78
数学	14	22	7	43
理科	36	92	21	149
実業	18	65	9	92
語学	12	35	2	49
計	115	279	48	442
百分率	26.0	63.1	10.9	100.0

このようにまとめてみると，特にある教科について，第2志望あるいはその他として目標とされやすいというような現象はみられない。しいていえば，国語と数学では，第1志望とされている割合が他の教科にくらべて多い，ということがいわれる。

§3. 教職課程履修者と家の職業

北海道大学においては，専門の課程の外に教職課程を履修することになつているので，学生にとつては相当の負担である。従つて，教職課程履修者，この場合調査の対象となつた学生は，将来自己の職業として教職をある程度予想しているとみてよいであろう。そのような学生の家計をささえている職業について調査してみた。

職業の分類としては，次のような方法を試みた。まず大きく，“自営”と“給料生活”及び“その他”に分けた。自営については，農林牧畜業・水産業・製造工業・商業及び金融業・医療・その他自営，給料生活者については，事務・技術・教育・医療・法務・労務・その他とした。

自営と給料生活者とについては，次のような結果となつた。

これについて，χ^2 を求めてみると，

$\chi^2=2.39986$

$\Pr\{\chi^2>4.61,\ df=2\}=0.10$

であるから，自営と給料生活者とによつて，教職についての志望に相違があるとは考えられない。

第16表 自営と給料生活者と志望

	自営	給料生活者	計
第1志望	37	72	109
第2志望	69	94	163
その他	10	22	32
計	116	188	304

註 総数327に満たないのは，その他があるため。

次に，自営及び給料生活者について，さらに細い分類についてみてみよう。自営においては，製造工業に従事している者の子弟では第1志望はきわめて少く，大部分が第2志望であることが目立つ。

第17表 自営と教職志望

	第1志望	第2志望	その他	計
農林牧畜	11	25	3	39
水産	0	3	0	3
製造工業	1	10	1	12
商業及金融	10	18	5	33
医療	3	2	1	6
その他自営	12	11	0	23
計	37	69	10	116

第18表 給料生活者と教職志望

	第1志望	第2志望	その他	計
事務	24	37	13	74
技術	17	15	4	36
教育	19	3	3	25
医療	2	20	0	22
法務	1	3	0	4
労務	6	13	1	20
その他	3	3	1	7
計	72	94	22	188

給料生活については，職業によつてかなりの相違がみられる。教育者の子弟では，殆んど75％が教職につくことを第1志望としている。次に，技術者・事務従事者の子弟に，教職につくことを第1志望としている者を多くみる。

この節でのべたことは，教職課程を受講している者であるから，すでに教職につくことをある程度予期している者についての調査の結果であつて，それぞれの職業の者の子弟の教職員志望についての調査ではないことを繰返しのべておく。つまり，ここでは，教職につくことを予期してた者について，彼等が教職につくことに対して，どの程度の強い関心をもつているか，ということについての調査を行つたものである。

附　言　調査研究を必要とする問題

高等学校の現状は民主主義社会建設の土台となる中等教育の普及により国民のすべてに普通教育を受ける機会を与えるという目的から逸脱して，大学進学への準備教育に偏しつつある傾向がみとめられる。この傾向は高等学校入学試験に関して，ただに教育問題としてのみでなく，社会問題としてその対策が考えられなければならない情勢をかもしつつある。高等学校教育の現状は上からの教育と下からの教育との板挟みになつて，国民教育の重要な問題がここにしわよせられているともいえよう。これらの問題を解決するためには次のような調査研究が必要である。

1. 高等学校へ進学しなかつたものはどのような生活をいとなんでいるか。

2. 彼等の生活に応じてどのような教育が施されているか。
3. それらの教育はどのような効果をおさめているか。
4. 高等学校の教育を世間ではどのように考えているか。
5. 高等学校へ進学できなかつたのはどのような理由によるか。(特に生活の条件によるものについての調査)
6. 高等学校へ進学を志望するものをすべて入学させるには，どのような困難が生ずるか。
7. それらの困難な問題は解決できないものであるか，どうか。
8. 大学への進学を希望するものと希望しないものに対する高等学校での指導をどのように行われているか。
9. 大学の入学試験に合格しなかつたものはどのような生活をいとなんでいるか。
10. 高等学校における学業成績と大学入学試験の成績及び大学進学後における学業成績とにはどのような関係があるか。
11. 高等学校と大学との教育にはどのような連関があるか。
12. 高等学校と大学における一般教育はどのように行われているか。

SUMMARY

The Position of the High School on the Educational Ladder
—Third Report—

By Mantaro Kido

This is the third report on the research carried out as a joint study by the members of the Faculty of Education, Hokkaido University.

The aim of this study is to make clear the character of the present-day high school education and its relation to higher education.

First of all, an attempt was made to find out the subject for future consideration by analyzing the present state of high school education.

For this purpose, investigations were made several times and its results were presented in the first and second report during the past three years.

This report is rather supplementary to the second report. And, it consists of following two parts.

Part 1. Study of high school education in the view of future course of pupil.

Part 2. Study of high school teacher training in the view of teacher training course at Hokkaido University.

Young Worker's Occupational Life and Educational Opportunity in Coal Mine Area

By Takakazu Ishihara Shigeru Ishii

The survey on above subject was carried out in Akabira (Hokkaido). The purpose is to grasp the education problem for young workers. The characteristics of the community surveyed is following :

1) Its population is increasing rapidly (from 1922 to 1955 increase as much as 600 %).
2) Its industry is only coal mine (82 % of working population is male and 18 % is female).
3) Its social status is classified, salaried employee, production workers, casual workers, and the unempoloyed.
4) Its social problems are unemployment, poverty, juvenile crime.

The characteristics of working pupils in part-time high school is following :

1) 57 % of part-time high school pupils is working in various establishments.
2) 30 % of them is casual labourers.
3) the degree of working pupil's fatigue is high.
4) they learn at P. M. 10–12.